

文部科学省委託事業
「在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業」

在籍学級での 日本語支援の視点を取り入れた 授業づくりの手引き

～台中日本人学校の実践から～



2020年3月

公益財団法人 海外子女教育振興財団

本書の刊行にあたって

弊財団は、1971年に外務省および文部省（現 文部科学省）の許可を受け、海外で経済活動を展開している企業・団体によって設立されて以来、海外赴任者・帰任者のための教育相談・情報提供や、日本人学校・補習授業校への財政上・教育上の援助等をはじめ、政府の行う諸施策および維持会員の要望に相呼応して幅広い事業を展開・実施してまいりました。

一方、日本政府においても、近年急速に発展してきた経済社会のグローバル化に対応する人材育成を喫緊の課題と捉えており、文部科学省では在外教育施設をグローバル人材育成拠点と位置づけて、大学・民間研究団体等の研修者と連携して評価・検証を行い、より高度なグローバル人材の育成を見据えた先進的なプログラムの開発・推進を図ることを打ち出しました。

そしてこのたび弊財団は文部科学省からの委託を受け、それらの指導体制、指導・評価方法、ICT教材の活用等の実証研究を担う「在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業」（略称：AG5）（委員長：佐藤郡衛・明治大学特任教授／前 目白大学学長／元 東京学芸大学副学長）を実施する運びとなりました。

その研究の一環として、2017年より、学習言語としての日本語の習得に係る課題を洗い出し、効果的に学びを進めるための日本語補習プログラムの開発を行ってまいりました。その取組の概要につきましては、AG5の成果発信サイト（<https://www.ag-5.jp/>）におきましてもお伝えしているところでありますが、取組の成果を海外子女・帰国子女教育に関わる多くの方々に広くご活用いただくため、今般、『在籍学級での日本語支援の視点を取り入れた授業づくりの手引き』を刊行することといたしました。

ここに、本研究開発にご尽力いただきました佐藤委員長をはじめとするAG5運営指導委員・研究員の皆様ならびにご協力いただきました台中日本人学校の学校関係者、児童生徒およびその保護者の皆様等すべての方々に対し、あらためまして厚く御礼申し上げる次第でございます。

グローバル化の進展に伴い、在外教育施設における国際結婚家庭児童や日本国内の外国人児童等が増加するなか、在籍学級での日本語学習支援が必要とされるケースが多くなっております。本書が日本語指導に携わる皆様にとりまして、子ども達が日本語と学習内容を同時に効果的に学ぶための手立てを考える一冊となり、今後の海外子女・帰国子女教育およびグローバル教育の発展にお役立ただけでしたら、本事業の実施者として、これに勝る喜びはありません。

弊財団では引き続き、「日本人学校など在外教育施設におけるバイリンガル・バイカルチュラル人材育成のためのプログラム開発」や「日本人学校におけるグローバル能力育成のためのプログラム開発」、「南米日本人コミュニティにおける日本型教育・日本語教育の発信・普及のためのプログラム開発」などに向けて本事業を推進し、これを通じて新たに開発したプログラムや提言を国内外の教育施設へ周知・普及することにより、高度グローバル人材育成に貢献することを目指してまいり所存でございます。今後とも皆様のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

2020年3月

公益財団法人 海外子女教育振興財団
理事長 中村雅治

目 次

台中日本人学校の概要と取り組み	1
日本語支援の視点を取り入れた授業づくりの手順	2
台中校で作成した学習指導計画のフォーマットの解説	2
指導略案の解説	5
台中校で作成した学習指導計画のフォーマット	6
日本語支援の視点を取り入れた授業づくりの事例	
» 小学校低学年の事例	
小学部 第1学年 国語科学習指導計画	11
単元名 「おおきくなった」	12
» 小学校中学年の事例	
小学部 第4学年 国語科学習指導計画	15
単元名 「ごんぎつね」	16
» 小学校高学年の事例	
小学部 第6学年 体育科学習指導計画	19
単元名 「バスケットボール」	20
» 中学校の事例	
中学部 第2学年 数学科学習指導計画	23
単元名 「図形の調べ方」	24

台中日本人学校の概要と取り組み

台中日本人学校（以下「台中校」）では、AG5 プロジェクトとして、2017 年度より在籍学級での日本語支援の視点を取り入れた授業研究に取り組んできました。台中校は、小学部・中学部の全校児童・生徒数が約 120 名、1 学年 1 学級の小規模校です。保護者のどちらか一方、もしくは共に、日本国籍ではない家庭の割合が約 50%に上っている点が特徴的です。その多くは、日本と台湾の国際結婚家庭の子供たちです。多少の差はありますが、家庭で日本語に触れる機会もあり、入学の時点で全く日本語を知らないという子供は多くはありません。しかしながら、教科の学習となると、教科書の音読、語彙や内容の理解、文章の作成等、様々な点でつまり子供が少なくないというのが現状です。特に母方が台湾の場合にその傾向が強く見られます。

一般的に、日常的な会話に必要な言語の力は「生活言語能力」、教科等の学習に必要な言語の力は「学習言語能力」と呼ばれています。教師は、生活言語能力と学習言語能力の違いを認識しておくことが必要です。生活言語能力は普段の生活の中で、比較的自然に身に付くと言われています。しかし、学習言語能力は、生活の中で自然と身に付くことは期待できません。学習言語能力を育てるためには、日本語や国語の授業だけでなく、すべての教科・総合的な学習の時間等を通して、意図的・計画的に支援していくことが必要です。したがって、在籍学級における日本語支援の視点を取り入れた授業づくりが、重要になるのです。

台中校では、日本語指導が必要な子供に対して、小学部の 1 年生から 6 年生まで、週 1 回行っている中国語の時間に替えて、日本語の補習指導をしてきました。中国語か日本語のいずれを選択して学習するかは、最終的には各家庭の判断によります。2018 年度までは 1 名の教員が小学部全学年の日本語指導を担当していました。この体制を、2019 年度からは変更し、学級担任が日本語指導を担当するようにしました。子供の在籍学級での学習状況を把握している担任が指導を行うことで、より効果的に学習言語能力を育てることができると考えたからです。

この日本語授業での少人数・個別の日本語指導と、在籍学級での日本語支援の視点を取り入れた授業づくりという、2 本柱での取り組みが、台中校の特徴であり優れた点です。中学部では、日本語の授業はありませんが、小学部と同じように各教科で日本語支援の視点を取り入れた授業研究に取り組みました。併せて、台中校では、主体的・対話的で深い学びのある授業をめざして、対話活動を取り入れた研究も行ってきました。日本語やことばの力を育成するという学校の課題に対し、日本語支援と対話活動の視点からの授業改善へ、学校全体で取り組んでいます。これは、まさにこれからの学校に求められているカリキュラムマネジメントにつながるものです。

内容的にはまだ研究途上のところもありますが、台中校で取り組んできた在籍学級での日本語支援の視点を取り入れた授業づくりについて、現時点での成果を、手引きとしてお届けします。同じ課題をもつ学校や先生方の参考になりましたら幸いです。

なお、本冊子には、台中校で取り組まれた実践の一部を掲載しております。他学年や他の教科については、AG5 のウェブサイト (<https://www.ag-5.jp/>) に掲載しておりますので、そちらも併せてご参照ください。

プロジェクト代表（AG5 運営指導委員） 見世千賀子

< URL >
<https://www.ag-5.jp/>
< QR コード >



日本語支援の視点を取り入れた授業づくりの手順

- ① 本時の授業の中で、特に日本語支援の対象とする子供を一人決めます。
- ② DLAのJSL 評価参照枠を参考にして、対象児童・生徒の日本語の状況を把握します。
- ③ 特に、本時との関連で、対象児童・生徒がつまずきそうな点を考えます。可能であれば、事前に対処しておきます。
- ④ 指導計画を作成します。本時の指導計画において、対象児童・生徒が授業にできるだけ参加できるようにするための、日本語支援の手立てを、5つの日本語支援の視点を参考に考えます。
- ⑤ 授業を振り返り、その成果や反省点を次の授業へ活かしていきましょう。

台中校で作成した学習指導計画のフォーマットの解説

● 在籍学級／対象児童・生徒の実態

ここでは、まず、授業を構想する上での必要な情報として、学級全体の国際結婚家庭等の子供の割合や言語使用、日本語の力の状況について記載しています。

そして、次に、本時の授業づくりにおいて、対象児童・生徒の日本語の力や在籍学級での活動の様子を記しています。クラスに日本語指導の必要な子供が複数いる場合も、特定の一人の児童・生徒を対象とすることで、在籍学級でのより具体的な支援の方策を構想しやすくなると考えます。また、その子供が授業に参加するために必要な手立ては、その子より日本語の力の高い子供にとっても有効な支援になるでしょう。台中校では、対象とする子供は、基本的に、日本語での意思疎通がある程度できており、適切な支援があれば、在籍学級での活動に部分的にでも参加できる子供のうち、最も日本語の支援が必要な子供を選んでいきます。

● DLA 採点表 < 全体評価 >

DLA (Dialogic Language Assessment) とは、文部科学省で開発された日本国内の外国人児童生徒の日本語能力を測定するための方法です。DLA は、〈はじめの一步〉として、「導入会話と語彙力チェック」、そして、言語の4つの技能、「話す」、「読む」、「書く」、「聴く」から構成されています。DLA は、このテストを通して、子どもの日本語の力の弱みや強みを把握し、それを学習指導へ活かすことを目指しています。台中校では小学部の1年生を対象に、入学時に導入会話と語彙力チェックを行いました。4技能の測定は、本来は指導者と子供とのマンツーマン形式で「対話」を通して実施することが重視されています。しかしながら、台中校では、教師が一人の子供に対して、この方法で測定する時間が十分にとれないため、代替案として、DLA 中の「JSL (Japanese as a Second Language: 第2言語としての日本語) 評価参照枠」を活用しました。DLA 評価参照枠では、日本語の力の段階を6段階の「ステージ」に分けています。

ここでは、JSL 評価参照枠の「話す」、「読む」、「書く」、「聴く」の4技能の視点から、日頃の学級での子供とのやり取りや活動の姿、作品等から、教師が観察し判断した状況にチェックを入れています。ステージ1～6までの判断の手がかりとしては、DLAで示されている、より詳細な内容項目を参考にしています。例えば、「読む」力は、表1のように示されています。(参照：表1)

各項目に対して、提示された方法での測定を行っていないので、教師の主観的な判断になっているのではないかという疑問が生じることは否めません。しかし、日本語指導をほとんど経験したことのない教師にとっては、子供たちの日本語能力をどのように把握すればよいかを知るうえで、このJSL 評価参照枠の観点はとても参考になります。また、評価した結果から、日本語能力と一口に言っても、1人の子供には4技能からみてもばらつきがあることや、1人1人の子供で弱みや強みが違うことが把握できます。したがって、そこから、その子供にあった日本語支援の方法を考えるヒントを得ることができます。なお、各ステージの在籍学級での活動との関係と、必要な支援の段階については、DLAでは表2のように示されています。(参照：表2)

詳しくは、文部科学省『外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメント(DLA)』を参照してください。https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/1345413.htm

表1 「読む」JSL 評価参照枠

ステージ	読解力	読書行動	音読行動	語彙・漢字	読書習慣・興味・態度
6	年齢枠相応の読み物を読んでよく理解できる	より深く理解するために必要な様々な読解方略(予測・推測、関連づけ、読み返し等)を効果的に使うことができる	文や意味のまとまりに区切りながら、流暢に読める	年齢枠相応の語彙や漢字がよく理解できる	年齢枠相応の本や読み物を進んでたくさん読む習慣がある
5	年齢枠相応の読み物を読んで、大まかに理解できる	理解するために必要な読解方略をある程度使うことができる	ややゆっくりではあるが、だいたい文や意味のまとまりに区切って、読める	年齢枠相応の語彙や漢字がある程度理解できる	年齢枠相応の本や読み物をある程度読む習慣がある
4	1つ下の年齢枠の読み物を読んで、大まかに理解できる	支援を得て、理解するために必要な読解方略をある程度使うことができる	安定して、文節や単語に区切って読める	1つ下の年齢枠の語彙や漢字が理解できる	1つ下の年齢枠の本や読み物を読む習慣がある
3	2つ(または3つ)下の年齢枠の読み物を読んで、大まかに理解できる	支援を得て、理解するために必要な読解方略を使い始める	ゆっくりではあるが、だいたい文節や単語に区切って読める	支援を得て、2つ(または3つ)下の年齢枠の語彙や漢字がある程度理解できる	支援を得て、2つ(または3つ)下の年齢枠の本や読み物を読む
2	普段よく目にする身の回りの簡単な単文が理解できる	文字の読み間違いに気づく	文字習得が進む	身の回りの語彙を聞く、または、読んで、理解できる	支援を得て、興味のある読み物や身の回りの書かれたものを読もうとする
1	身の回りのよく知っている語彙を読んで、理解できる	文字と音との対応ができる	文字習得がはじまる	身の回りのよく知っている語彙を聞く、または、読んで、理解できる	ごく短い読み物や書かれたものに興味を示す

* 年齢枠と読み物のレベルとの関係は、本章5節の【テキストの対象年齢】を参照してください。

引用：文部科学省初等中等教育局国際教育課（H26年1月）『外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメント(DLA)』p.72

表2 JSL 評価参照枠〈全体〉

ステージ	学齢期の子供の在籍学級参加との関係	支援の段階
6	教科内容と関連したトピックについて理解し、積極的に授業に参加できる	支援付き自律学習段階
5	教科内容と関連したトピックについて理解し、授業にある程度の支援を得て参加できる	
4	日常的なトピックについて理解し、学級活動にある程度参加できる	個別学習支援段階
3	支援を得て日常的なトピックについて理解し、学級活動にも部分的にある程度参加できる	
2	支援を得て、学校生活に必要な日本語の習得が進む	初期支援段階
1	学校生活に必要な日本語の習得がはじまる	

引用：文部科学省、同掲書 p.8

● 日本語授業での指導内容／本時との関連

ここには、「日本語授業」での指導内容について、特に本時との関連において、記載しています。まず、本時の学習を行う上で、予想される対象児童・生徒の日本語のつまずきを考えます。そして次に、それに対して、事前にどのような指導をしたのかを記しています。在籍学級での本時の授業に参加していくために、先行的に学習した事を取り上げています。小学部で本時の授業担当者が担任でない場合は、事前にこんな指導をしてほしいと担任に対してリクエストした指導内容が記載されています。中学部では、日本語の授業を行っていないため、本時の授業の中で、日本語指導との関連で意識的に行ったことを記しました。

（＊なお、在籍学級での授業に先立って、取り出しでの日本語指導で、先行的に扱っていただいた方がよい授業の内容と進め方については、台北日本人学校で小学校1・2年生を対象にした日本語補習授業の活動案集を作成しましたので、そちらも参考にしてください。）

● 個別支援の視点・方策

対象児童・生徒に対して行った具体的支援の方策について、該当する項目にチェックをしています。この5つの支援の視点については、文部科学省で開発された『学校教育におけるJSLカリキュラム（中学校編）』で示されている「日本語支援の5つの視点」の具体例を参考に、台中校で作成しました。

5つの視点では、基本的に次のような支援を行います。

理解支援：日本語や学習内容の理解を促す支援

表現支援：表現内容の構成や日本語での表現を促す支援

記憶支援：語彙や表現の記憶を促す支援

自律支援：自分で学習する力を高める支援

情意支援：学習への動機づけなど、情意的側面での支援

詳しくは、文部科学省初等中等教育局国際教育課（H19年3月）『学校教育におけるJSLカリキュラム（中学校編）』（特にp.13～15）を参照してください。

https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2015/10/06/1235804_002.pdf

指導略案の解説

1～3・5 単元名、単元の目標、単元計画、本時の目標、評価規準
これらについては、一般的な指導案と同じです。

4 本時の展開－対象児童・生徒への具体的支援

ここで、対象として選んだ児童生徒への具体的な支援の方法を記載しているところが、本指導案の特徴であり、最も重要なポイントになります。

まず、本時の学習内容・活動に対して、学級全体に向けて行う手だて・留意点を記載しています。これは、通常の指導案と同じです。

次に、「対象児童・生徒への具体的支援」に、その子供を本時の学習活動に参加させるために考えた、具体的な日本語支援の方法を記載しています。クラスに、同じような日本語のレベルの子供が他にもいる場合には、その子にとっても有効な手立てとなるでしょう。

すべての支援に対してではありませんが、行う支援が、「日本語支援の5つの視点」からどれに対応しているのか、【理】【表】【記】【自】【情】で表示しています。例えば、小学校1年生の国語の指導略案に、「ひらがなが思いだせるように、ひらがな表シートを見せる」とありますが、これは、書くための活動を支える表現支援でもあり、文字が思い出せないことで、やる気を失ってしまうことを避けるための情意支援でもあります。

● 授業のポイント

特に、授業全体に対する留意する点や力点等を記載しています。

台中校では、2019年度の学校の研究主題を「主体的・対話的で深い学びをめざした、授業展開の工夫と学びの連続性の保障」とし、対話活動のあり方についても、研究してきました。対話活動は自分の考えを表現し、相手に伝えたり確認したりしてもらうことで、日本語を運用する練習になる、日本語の力を伸ばす上でも効果的な活動です。したがって、ここでは対話活動の観点と日本語支援の視点から、台中校の教師が考えた授業改善のポイントが記してあります。

6 資料

実際に、対象児童・生徒への具体的支援で使用した資料や授業での支援の様子を示しています。

7 授業者の振り返り

ここでは、実際に授業を行った教師の授業後の振り返りのコメントを記しています。

事前に日本語授業で行ったどのようなことが、本時の授業に生きたのか、本時のどのような具体的支援が、対象児童・生徒へのどのような学習成果につながったのか等について、記載しています。

● 日本語支援の視点からのコメント

最後に本時の授業について、日本語支援の視点からどんなところが特に良いか、参考になるかというコメントを記しました。それぞれの授業の良い点を参考にしながら、在籍学級での具体的支援の方法を考えてみてください。

台中校で作成した学習指導計画のフォーマット

対象児童・生徒の選定にあたっては、日本と台湾の国際結婚家庭（日台家庭）の子供で、日本語のレベルが高過ぎず低過ぎず…

クラス全体の国際結婚家庭及び支援が必要な児童の割合を記載する。

担任以外は、担当教科での実態について簡単に記載する。

DLA の JSL 評価参照枠を参考に、子供の日本語の力の状況を把握する。

日本語授業での指導内容を簡潔に記載する。

担任以外は、担任へリクエストした指導内容を記載する。

使用した教材や教具も記載する。

対象児童・生徒が本時で予想されるつまずきに対応する日本語支援の手だてを記載する。

該当する項目に○を記入する。

文部科学省『学校教育における JSL カリキュラム（中学校編）』の日本語支援の5つの視点を参照。

可能であれば、年度末に再度 DLA の結果を記入し、子供の日本語力の変容を確認する。

小学部 第6学年 算数科学習指導計画

在籍学級／対象児童の実態

クラス

対象児童

DLA 採点表＜全体評価＞（月）

ステージ	DLA(話す)		DLA(読む)		DLA(書く)		DLA(聴く)		JSL 評価参照枠（全体）	支援の段階
	話の内容とまとまり	話の形式的正しさ	読解力	読書行動	文の質・正確性	構成	聴解力	聴解行動		
6										支援付き自律学習段階
5										個別学習支援段階
4										個別学習支援段階
3										初期支援段階
2										初期支援段階
1										初期支援段階

日本語授業での指導内容／本時との関連

個別支援の視点・方策

理解支援	表現支援	記憶支援	自律支援
言い換える	選択肢を示す	視覚化する	言葉の調べ方
視覚化する	表現方法を示す	連想させる	情報を得る方法
例示・比喩・対比	モデルを示す	グループ化する	その他
明示する	キーワードを示す	接触機会を増やす	
簡略化・整理・補足	対話で引き出す		
既知知識の活性化	内容構成のためのシート		
	母語で表現させる		
			達成感
			プレッシャーを与えない
			その他



学級全体に向けて行うことは、「手だて・留意点」に記載する。

「対象児童・生徒への具体的支援」は、基本的に、その子供のみに向けた支援を記載する。

「日本語支援の視点」をより具体的に記載する。

例えば、
「必要な情報を黒板に表示し続ける」
「パワーポイントの画像を印刷したものを用意する」
「定型文の書かれたカードを渡す」
「言わせた後に書かせる」
「提示し続ける」
「画面に大きく映す」……など。

4 本時の展開（6 / 11）

【理】：理解支援 【表】：表現支援 【記】：記憶支援 【自】：自律支援 【情】：情意支援

段階	学習内容・活動	手だて・留意点	対象生徒への具体的支援
導	1. 前時までの学習を振り返る。 ○「速さ」「道のり」の公式を確認。	○パワーポイントで前時までの想起させ、発表させる。	○ノートに書かせた後に言わせる。【情】 ○公式を繰り返し言わせる。【表】
	2. 本時の問題を確認する。 ○問題を把握する。		
	3. 本時の学習課題を確認する。		
展	4. 一人学びを行う。 ○二重数値直線を書き、立式し、答えを求める。		○パワーポイントの画像を印刷したものを渡す。【理】
	5. ペアで交流する（対話活動）。 ○よりよい考え方を知る。	○自分の考えを伝えるときに相手の考えを聞くことで、思考を深める。	○二十数値線などの図を繰り返し提示する。【表】
	6. 全体交流 ○二重数値直線などの図めきの発表を行う。	○よりわかりやすい説明の発表を行う。	○説明の定型文を書いたカードを渡す。【表】
ま と め	7. 本時のまとめを行う。		
	8. 定着問題を解く。 9. 振り返り。 ○本時の学習を振り返る。	○道のりを求める公式を用いて、速さと道のりから時間を求めさせる。	

- ①「対話活動」に関する手だて
・有効な対話活動ができるようにするため、ペアを指定し交流させる。
- ② 日本語支援の視点
・学習内容を理解し、理解を深めるために、視覚に訴える資料を多用する。

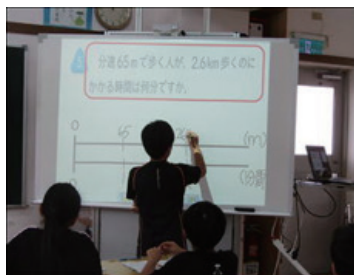
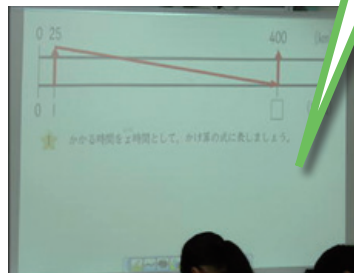
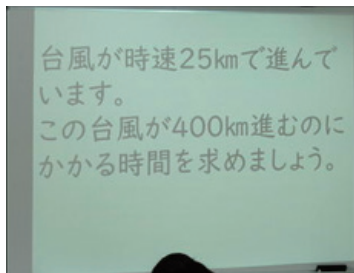
授業のポイント

授業で使った教材や教具について資料を記載する。授業写真や画像で提示する。

5 評価規準

- ・道のりを求める公式を用いて、速さと道のりから時間を求めることができる。(技能)
→発言・ノート

6 資料【具体的な活動の様子】



☆ 問題文や課題、まとめなどは繰り返し提示することで理解させたり、ノートに書く時間を確保したりする。

☆ 二重数値直線図などは印刷しカード化して、対象児に渡す。

☆ ICTを活用することで、理解支援を充実させる。

小学校高学年の事例

7 授業者の振り返り



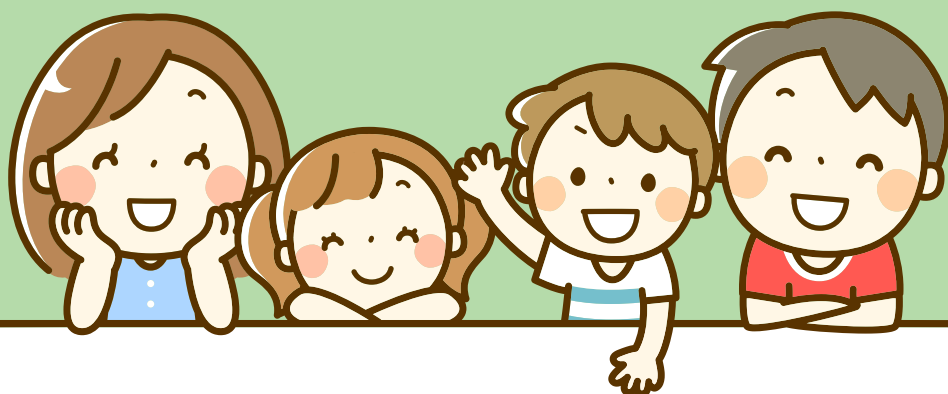
☆ パワーポイントで前時の学習内容を提示したことで、想起の支援となった。→記憶支援

☆ 二重線直線図を印刷カード化して、渡したことで、問題を解く手助けになった→理解支援

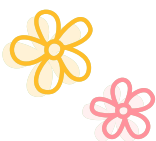
☆ BIGPAD に書かせることで、思考を整理したり、自分の言葉で説明したりできるようになった。

5





日本語支援の視点を取り入れた
授業づくりの事例



小学部 第1学年 国語科学習指導計画

在籍学級／対象児童の実態

クラス

- ・ 13人中7人が日台家庭で、家庭では中国語を使う児童が多い。その内の4人が日本語授業を選択している。クラス内での日本語力の高い子、低い子の差が大きい。

対象児童

- ・ ひらがなの読み書きが完全に習得できていない。
- ・ 全体指示を正確に聞き取ることができず、質問してくることが多い。
- ・ 積極的に手を挙げて発言するが、伝えたいことを言葉にできず、止まってしまうことがある。

DLA 採点表＜全体評価＞（6月）

支援の段階	JSL評価参照枠(全体)	DLA(聴く)		DLA(書く)				DLA(読む)				DLA(話す)				ステージ											
		総合	語彙・表現	聴解行動	聴解力	総合	書く態度	書字力・表記ルール	語彙・漢字力	文の質・正確度	構成	内容	総合	読書習慣・興味・態度	語彙・漢字		音読行動	読書行動	読解力	総合	話す態度	発音・流暢度	語彙	文法的正確度	文・段落の質	話の内容とまとめ	
支援付き 自律学習段階																											6
																											5
個別学習 支援段階																											4
																											3
初期 支援段階																											2
																											1

日本語授業での指導内容／本時との関連

- ① ひらがなの練習
- ② 文作りの練習
- ③ 観察記録文の観点に出てくる言葉の意味の確認

おおきさ→おおきい・ちいさい
たかさ→たかい・ひくい
ふとさ→ふとい・ほそい

個別支援の視点・方策

理解支援

言い換える

- 視覚化する
- 例示・比喩・対比
- 明示する
- 簡略化・整理・補足
- 既有知識の活性化

表現支援

選択肢を示す

表現方法を示す

- モデルを示す
- キーワードを示す
- 対話で引き出す
- 内容構成のためのシート
- 母語で表現させる

記憶支援

- 視覚化する
- 連想させる
- グループ化する
- 接触機会を増やす

自律支援

- 言葉の調べ方
- 情報を得る方法
- その他

情意支援

- 達成感
- プレッシャーを与えない
- その他

おおきくなった

1 単元の目標

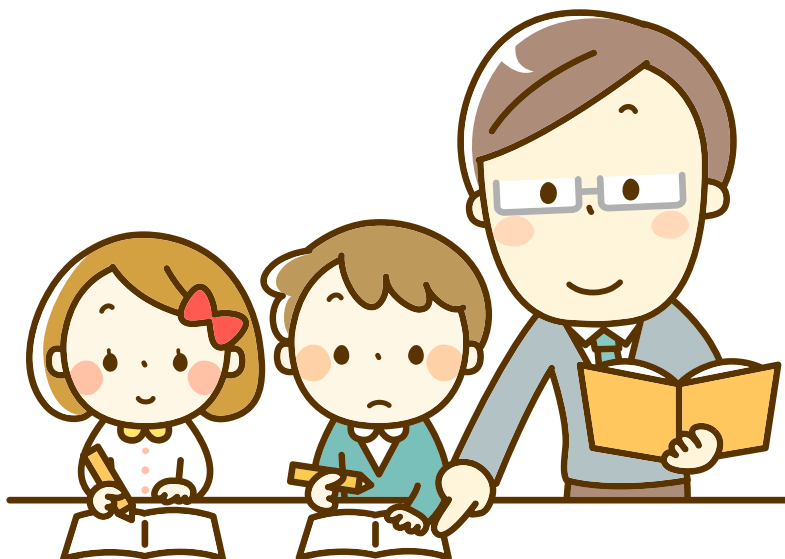
観察したことを記録する文章を書くことができる。

2 単元計画

- ①「よくみて、くわしくかこう」という学習課題を確認する。
- ② 作例を見て書き方を確かめ、どんな観点で観察したいかを出し合う。
- ③ 観察記録を書き、友達と交流する。(本時)
- ④ いろいろな観点から観察することで、様子を詳しく記録できることを確かめ、学習を振り返る。

3 本時の目標

観点を主語にして文で表したり、観点を項目にしてメモしたりする書き方の違いに気づき、書き方を選んで同じように書くことができる。



4 本時の展開（3 / 4）

【理】：理解支援 【表】：表現支援 【記】：記憶支援 【自】：自律支援 【情】：情意支援

段階	学習内容・活動	手だて・留意点	対象児童への具体的支援
導入	1.前時までの学習を振り返る。 ○観察記録文を書くときの観点の確認をする。 いろ かたち おおきさ たかさ ふとさ さわったかんじ においかず 2.本時のめあてを確認する。 めあて あさがおのようすがよくわかるように、ぶんをかこう。	○黒板に貼った観点のカードを声に出して言わせる。	○個別に言わせて、正しく読めているか確認する。
展開	3.教科書の二種類の観察記録文の書き方を理解する。 ○音読する。 ○二つの書き方を比べる。 4.二つの書き方のうち一つを選び、自分の朝顔の観察文を書く。	○二つの観察記録文の書き方について、共通点、相違点を見つけさせる。 ○二種類のワークシートを用意しておき、好きなほうを選んで書かせる。 ○ひらがな表を掲示し、文字を確認しながら書かせる。	○文字を見ながら音読しているか、机間指導で確認する。 ○書きたいことを声に出して言わせた後、書かせる。【表】 ○ひらがなが思い出せるように、ひらがな表シートを見せる。 【表】【情】→ 資料1
	5.交流する。 対話活動 書いた文を伝え合う。	○ペアで交流させる。 ○よかったところを伝えるようにさせる。	○伝え方の定型を示したシートを見せる。 【表】→ 資料2
	6.書いたものを発表する。	○みんなに伝わる声で発表させる。	
まとめ	7.本時のまとめを行う。 まとめ いろいろなことをよくみたりさわったりしてかくと、ようすがくわしくわかる。		

授業のポイント／

- ①「対話活動」に関する手だて
 - ・相手に伝わる読み方をおさえた上で対話活動をさせる。
- ② 日本語支援の視点
 - ・日本語や学習内容の理解を促すために、視覚化する。書くことに抵抗を感じる児童がいるため、ワークシートを使用し、個別に話を聞きながら書かせるようにする。

5 評価規準

- 教科書の二つのモデルを見て、書き方を選んで同じように書いている。
- 観察したことを記録するために的確な観点をを用いている。

6 資料

資料1

ひらがなひょう

かきじゅん

わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ
	り		み	ひ	に	ち	し	き	い
を	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う
	れ		め	へ	ね	て	せ	け	え
ん	ろ	よ	も	ほ	の	と	そ	こ	お

資料2

がわかりやすかったです。

のところがよかったです。



7 授業者の振り返り



スクリーンを使い、視覚化させることで、理解を促すことにつながった。

観察記録文の観点に出てくる言葉について先行して日本語授業で取り扱ったことで、言葉の意味を理解して使わせることができた。

書きたいことを対話から引き出して書かせることで、自分の思いを表現させることができた。



対象児童がどのような部分で困難を感じるか、授業中、対象児童のどのような部分を確認して支援をしていくのかが、具体的に書かれています。多くの子どもがいる在籍学級の授業であるからこそ、授業計画の段階でこうした視点を明確にしておきたいものです。

小学部 第4学年 国語科学習指導計画

在籍学級／対象児童の実態

クラス

- 16人中8人が日台家庭である。4月の学力調査の結果、日本人家庭と日台家庭で、100点満点中15点の差が生じている。正確な読み取りや、自分の考えを表すことに関しては、支援が必要である。

対象児童

- 学習に対する意欲はあるが、集中力がもたない。
- 登場人物の気持ちを正確に読み取れない。
- 積極的に手を挙げて発言するが、伝えたいことを言葉にできず、止まってしまうことがある。

DLA 採点表＜全体評価＞（9月）

ステージ	DLA(話す)				DLA(読む)				DLA(書く)				DLA(聴く)				JSL評価参照枠(全体)	支援の段階
	話の内容とまとまり	文・段落の質	文法的正確度	語彙	発音・流暢度	話す態度	総合	読解力	読書行動	音読行動	語彙・漢字	読書習慣・興味・態度	総合	聴解力	聴解行動	語彙・表現	総合	
6	△																	支援付き 自律学習段階
5	○	○	○			○	○		○	○	○		○		○	○	○	
4	△				○			○				○		○	○			個別学習 支援段階
3	△																	
2	△																	初期 支援段階
1	△																	

日本語授業での指導内容／本時との関連

- 登場人物の確認（性格や人物関係等）
- 音読指導
- わからない語彙の意味の確認
「お念仏」「かげぼうし」「あわれ」等、難しい日本語の意味は、日本語授業で確認しておく。【自】【記】

個別支援の視点・方策

理解支援

- 言い換える
- 視覚化する
- 例示・比喩・対比
- 明示する
- 簡略化・整理・補足
- 既有知識の活性化

表現支援

- 選択肢を示す
- 表現方法を示す
- モデルを示す
- キーワードを示す
- 対話で引き出す
- 内容構成のためのシート
- 母語で表現させる

記憶支援

- 視覚化する
- 連想させる
- グループ化する
- 接触機会を増やす

自律支援

- 言葉の調べ方
- 情報を得る方法
- その他

情意支援

- 達成感
- プレッシャーを与えない
- その他

単元名

読んで考えたことを話し合おう

「ごんぎつね」

1 単元の目標

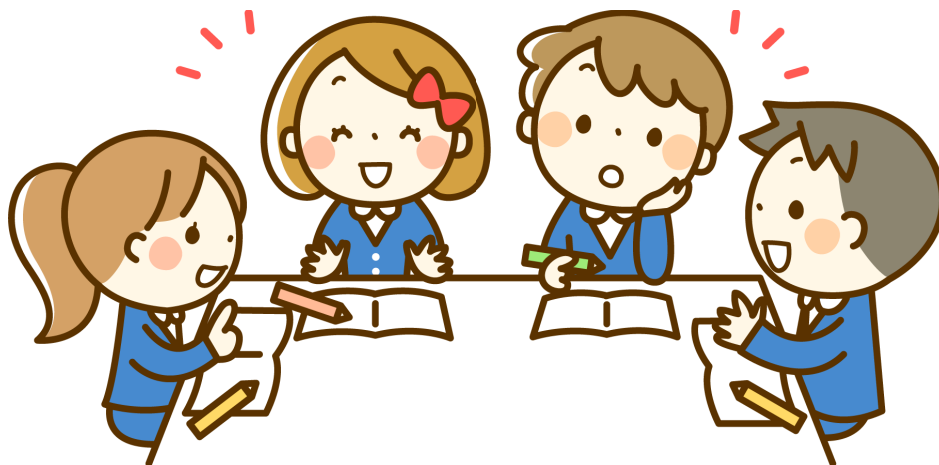
- ・ 叙述に着目して物語を読み、感じたことや考えたことを進んで話し合うことができる。
- ・ 場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて、叙述を基に想像して読むことができる。
- ・ 様子や行動、気持ちや性格を表す語句の量を増やす。

2 単元計画

- ① 「ごんぎつね」のあらすじや言葉の意味を確認する。
- ② 場面ごとに人物の気持ちや情景を読み取る。
- ③ 読んで考えたことを交流する。

3 本時の目標

ごんの行動や気持ちが分かる叙述を基に、兵十の後をついていくごんと「神様のしわざ」だと言われたごんの気持ちを読み取り、自分の考えをまとめることができる。



4 本時の展開（9 / 12）

【理】：理解支援 【表】：表現支援 【記】：記憶支援 【自】：自律支援 【情】：情意支援 ○：発問 ◎：主発問

段階	学習活動	手だて・留意点	対象児童への具体的支援
導入	1.学習課題の確認 兵十たちの話を聞いて、ごんはどんな気持ちになったのだろう。		
展開	2.5場面の音読 3.話し合い ○「兵十のかげぼうしをふみふみ行きました」からごんのどんな気持ちが分かりますか。 ◎どうして「つまらないな」と思ったのだろう。 ○「引き合わないなあ」とはどういうことだろう。 ごんは、兵十がどんな話をするのかわくわくしてついていったのに、自分のつぐないの行動が神様のしわざだと言われてがっかりした気持ち。	○登場人物の行動や気持ちが表れた叙述に線を引かせる。 ○「かげぼうし」「ふみふみ」の表現に着目させ、楽しみながら兵十の後を追うごんの気持ちを想像させる。 ○考えを深めることができるように、ペアで考えを交流させる。 ○全体の話し合いでは、子供の考えを整理して板書する。 ○「引き合わない」を言いかえる言葉を考えさせる。 ○ごんの償いの気持ちが変わっていることを捉える。	○誰のせりふか分かるように、しるしをつけておく。【理】 ○教師と対話し、自分の考えを引き出させる。【表】 ○ノートに書いた考えの中から自分の考えに近いものを二つ選び、○を付けさせる。【表】【情】
まとめ	4.まとめ ○ごんの気持ちを自分の言葉でまとめましょう。 5.振り返り	○まとめを書いた子供から発表させる。 ○ごんの気持ちの変化を捉えてまとめた子供の考えを板書する。	○板書された考えを自分のノートに書き写す。【表】

授業のポイント／

①「対話活動」に関する手だて

- 自分の考えをもつことができる子と考えをもつことが苦手な子をペアにして交流させることで、自分の考えをはっきりさせたり、考えを交流する語彙を見つけたりすることができる。

② 日本語支援の視点

- 誰が言ったせりふかを確認し、物語の理解を深める。
- 対話により、言葉を引き出したり補足したりし、自分の考えが文章に書けるよう、助言する。

5 評価規準

ごんの行動や気持ちが分かる叙述を基に、兵十の後をついていくごんと「神様のしわざ」だと言われたごんの気持ちを読み取り、ごんの気持ちの変化について自分の考えをまとめることができている。

6 資料

井戸	（かみどすく）	お園黒	家内	びく	じれったい	（はりつく）	ぬかるみ	百姓
地下水をくみとるようにしたもの		昔、結婚した女性は歯を黒くそめた。	自分の妻をよこい方	どった魚を入れておくか				農民。一般の人。

日本語授業で使ったワークシート

（加）	（兵）	（加）	（兵）	（加）	（兵）	（加）	（兵）
「ほんとかい。」	「ごんは、二人の後をつけていき	「おつかあが死んでからは、だれ	「おれあ、このごろ、とても不思議	「おれあ、このごろ、とても不思議	「おれあ、このごろ、とても不思議	「おれあ、このごろ、とても不思議	「おれあ、このごろ、とても不思議

誰のセリフかわかるように印をつけた



ペアで考え交流し合う子供達

7 授業者の振り返り

日本語支援が必要な子供にとって、登場人物の関係を捉えたり誰のせりふか確認したりすることが、登場人物の気持ちを捉える上で重要であることが再確認できた。今回は、あらかじめ教師が選定した表現を授業で取り上げ、物語の読み取りを進めた。その結果、日本語支援が必要な子供も、叙述から登場人物の気持ちやその変化に気づくことができた。今後は、読み取ったことから自分の考えをもてるように、支援を考えていきたい。



在籍学級では複数の学習目標が設定されていますが、日本語力が十分でない子供の場合、その中のいくつか（一つの場合も）に絞ることもあります。この事例では「ごんが『つまらないな』と思った理由」を児童なりに考えられるようになることに焦点を当てています。また、書くことが苦手な対象児童に、「友達の意見の中から近いものを選ばせる」という表現支援も見られます。この授業で何を求めるのか、明確になっている事例です。

小学部 第6学年 体育科学習指導計画

在籍学級／対象児童の実態

クラス

- 15人中、9人が日台家庭で、家庭では中国語を使う児童が多い。語彙に乏しく、初めて読む文章が拾い読みである児童も少なくない。また、意味を理解できずに読んでいることが多々ある。

対象児童

- 語彙が非常に乏しい。指示や説明を正確に聞き取れず行動が遅れてしまうことがよくある。

DLA 採点表＜全体評価＞（9月）

支援の段階	JSL評価参照枠(全体)	DLA(聴く)				DLA(書く)				DLA(読む)				DLA(話す)				ステージ								
		総合	語彙・表現	聴解行動	聴解力	総合	書く態度	書字力・表記ルール	語彙・漢字力	文の質・正確度	構成	内容	総合	読書習慣・興味・態度	読書行動	音読行動	読解力		総合	話す態度	発音・流暢度	語彙	文法的正確度	文・段落の質	話の内容とまとめ	
支援付き 自律学習段階																										6
																										5
個別学習 支援段階																										4
																										3
初期 支援段階																										2
																										1

日本語授業での指導内容／本時との関連

- 読み聞かせ
- 文法の練習問題（尊敬語等）
- 教科書の音読・語彙の確認と補充問題
- 体育の授業時間内で、語句の確認が足りないときは、日本語の授業の中で、バスケットボールのイラストを見せながら日本語での言い回しを練習した。

個別支援の視点・方策

理解支援

- 言い換える
- 視覚化する
- 例示・比喩・対比
- 明示する
- 簡略化・整理・補足
- 既有知識の活性化

表現支援

- 選択肢を示す
- 表現方法を示す
- モデルを示す
- キーワードを示す
- 対話で引き出す
- 内容構成のためのシート
- 母語で表現させる

記憶支援

- 視覚化する
- 連想させる
- グループ化する
- 接触機会を増やす

自律支援

- 言葉の調べ方
- 情報を得る方法
- その他

情意支援

- 達成感
- プレッシャーを与えない
- その他

単元名

バスケットボール (ボール運動 ゴール型)

1 単元の目標

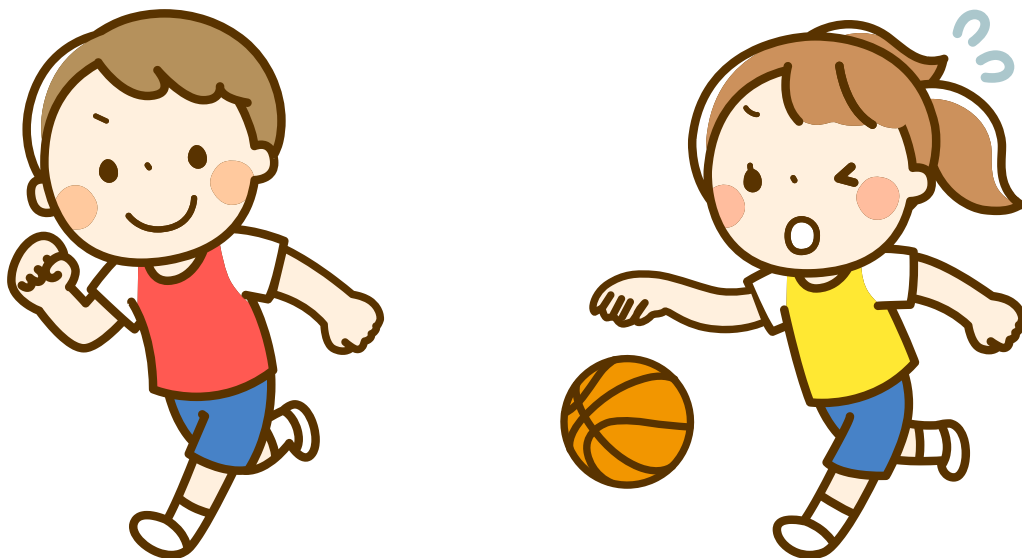
チームでパスをつないだり、簡単な作戦を考えたりして、ゲームを楽しむことができる。

2 単元計画

- ① オリエンテーションと試しのゲームをする。
- ②～④パスをつないだり、シュートしたりしてゲームを楽しむ。
- ③～⑥チームで簡単な作戦を立て、ゲームを楽しむ。(⑥本時)

3 本時の目標

シュートに繋がる視点「声」に気付き、積極的に声をかけながらゲームを楽しむことができる。



4 本時の展開（6 / 6）

【理】：理解支援 【表】：表現支援 【記】：記憶支援 【自】：自律支援 【情】：情意支援

段階	学習内容・活動	手だて・留意点	対象児童への具体的支援
導入	1.学習の場の準備をする。 2.前時を振り返り、めあてを確認する。 ○本時の自分のめあてを確認する。 学習のポイント シュートにつながる声をかけてプレーしよう。	○安全面に留意して活動できるように観察し、指導する。 ○シュートに繋がる声かけにはどんなものがあるのかを確認し、学習カードに記入させる。	○バスケットボールの専門用語は、母国語と日本語の両方を書いたカードを提示する。【理】 資料1
展開	3.準備体操をする。 ○30秒シュートをする。 4.ゲームをする。 ○A、Bの2つのコートを使用する。 ○ゲーム時間：24分（6分×3ゲーム+移動2分×3） ○人数4対4（欠席者がいる場合は、3対3） ○ルールについては、学習カード2ページ目の基本ルールを採用する。	○シュートが上手く打てない児童には、シュートが打ちやすい場所やねらう位置を工夫させる。 ○つまずいている児童を指導する。 - パスがもらえない →パスを要求する声を出すようにさせたり、相手がいないところを見つけて動くようにさせたりする。 - パスが出せない →チームで声をかけ合うようにさせる。	○プレーにつまずいている場合は、声をかけ、パスをもらったり出したりする位置を意識させることで触球数を増やす。プレー中は、母国語を使ってもよいことにする。【情】
まとめ	5.振り返りをする。 〈チームでの対話活動〉 ○学習を振り返り、めあては達成できたか確認する。 ○シュートに繋がる「声」かけについて理解する。 ○片付けをする。 学習のポイント シュートにつながる声かけを積極的に行うと、シュートを打てる回数が増える。	○シュートに繋がる声かけは、バスケットボール以外の单元にも繋がることを想起させる。	○振り返りカードを記入する際、母国語カードを渡す。【表】 資料1・2

授業のポイント

①「対話活動」に関する手だて

- 上位の子どものワンマンプレーを減らし、触球数・全員のシュート機会・運動量を増やすために、声の出し方・位置（味方や相手）を意識させる。

② 日本語支援の視点

- ルールを確認したりゲームをしたりする中で視覚に訴える掲示物を提示したり、実際にやってみせたりして理解を深める。

5 評価規準

- みんなで協力しながらゲームを楽しみ、ゲームの判定や結果に対して公正な判断を取ろうとしている。【態度】
- チームで簡単な作戦を考えてプレーをしている。【思考・判断】
- パスをもらえる位置に動きパスをもらい、シュートを入れることができる。【技能】

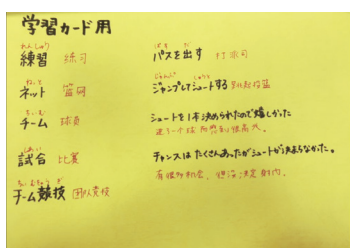
6 資料

資料 1

中国語	日本語
篮球场	コート
后卫	ガード
运球	ドリブル
传球	パス
旋转	ピボット

学習のはじめは、基本的な言葉のみをカードに書いて渡した。そのあと、チームでの練習やゲームを重ねる中で、本人と相談しながら語彙を増やしていった。
必要に応じてカタカナには、ルビをふったり、難しい用語にはイラストを加えたりした。

資料 2



学習カード用の語彙ノートは、体育の学習中、常に持たせてある。その都度わからなかった語句は記入していく。
例文をいくつか事前に用意しておき、どうしても日本語で書けない場合は、例文の中から選んで書き写したり、語句を置き換えたりしながら振り返りカードを記入させた。

7 授業者の振り返り



チームごとに作戦を立てるときは、難しい日本語の語句がわからず戸惑っている姿が見られたので、母国語で友だち同士教え合う時間を設けることで、理解を促すことができた。

試合の中では、咄嗟に日本語が出てこず戸惑う場面が見られたので、試合中のみ母国語で指示を出したり友だちに話しかけたりしてもよいことにした。その結果ゲームを楽しむことができた。また、試合が終わった後は、試合中に使った母国語を日本語に置き換えられるように学習カードを用いて復習したことで、自分でふり振り返りカードを日本語で書くことができた。



実技科目は「日本語支援は不要」と考えがちですが、学習に参加する際の日本語の大切さは同じです。同時に、この児童のケースではそれまでに培ってきた母語の力を指導に生かしています。体育の語彙を理解させると同時に、それを使って振り返りを書かせ日本語の力を伸ばそうとする配慮が見られます。また、対象児童が授業に参加できるようにするために母語の使用を認めるというのも、多くの外国語話者がいる日本人学校では有効かと思います。

中学部 第2学年 数学科学習指導計画

クラス

- 对象生徒

- 23

「図形の調べ方」

1 単元の目標

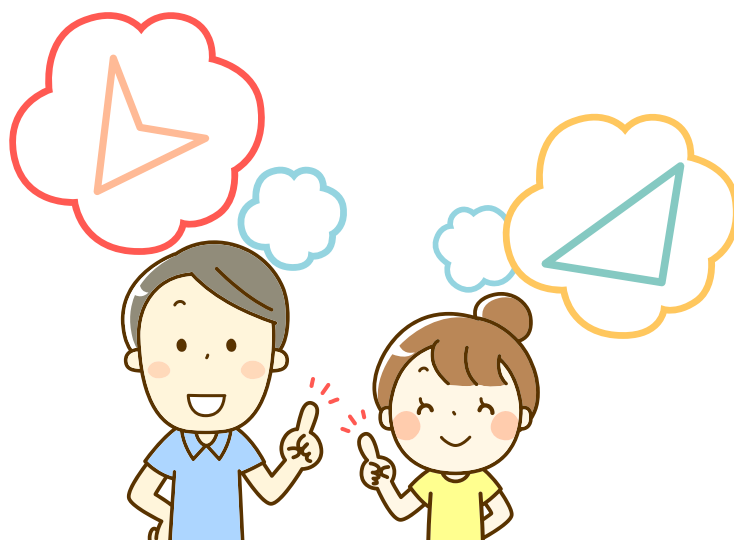
図形の性質を調べる上で基礎となる見方・考え方や基本的性質を、観察や操作、実験などの活動を通して明らかにし、論証の意義と推論の進め方について理解する。

2 単元計画

①～④ 角と平行線	平行線の性質や平行線になる条件をもとに、新たな性質を説明する。(③本時)
⑤～⑦ 多角形の角	三角形の1つの外角は、そのとなりにない2つの内角の和であることを見だし、説明する。
⑧～⑩ 三角形の合同	三角形の決定条件をもとにして、合同な三角形をかくのに必要な条件を説明する。
⑪⑫ 証明とそのしくみ	仮定と結論をつなぐ根拠を説明し合う。
⑬～⑯ 証明の進め方	合同条件を使って簡単な図形の性質を証明し合う。

3 本時の目標

平行線の性質や三角形の外角の和の性質をもとに、くさび形の内角の和を説明できる。



4 本時の展開 (3 / 16)

【理】：理解支援 【表】：表現支援 【記】：記憶支援 【自】：自律支援 【情】：情意支援

段階	学習内容・活動	手だて・留意点	対象生徒への具体的支援
導入	1. 三角形の内角の和が 180 度になることの説明を行う。 2. 三角形の外角の性質について確認する。 3. 本時の課題を提示する。	○互いに説明し合い、代表が全員の前で説明を行う。 ○暗唱できるまで音読させる。	○指名して発言させて、直接確認をする。【記】
	課題 くさび形の四角形の内角の和は何度になるでしょうか。		
展開	4. 一人学びを行う。 ○性質を利用するためにはアイディア（補助線）が必要であることに気づく。 5. ペアで交流する（対話活動）。 6. 全体交流 7. 生徒の言葉でまとめを行う。	○「図形の性質カード」を掲示する。 ○三角形の外角の性質や平行線の性質を使って説明できることを伝える。 ○根拠を説明させる。「～(根拠)だから～です。」 ○1で説明していない生徒に説明させる。 ○平行線の性質や三角形の外角の性質を利用することで、「角を集めていること」に気づかせる。	〈直接対話で指導する〉【表】【理】 ○「注目する三角形はどれですか。ペンでなぞってください。」 ○「この三角形で外角に当たる場所に印を付けてください。」 ○「この外角と等しい関係になる内角はどこですか。印を付けてください。」 ○「どうしてですか。」 ○「同じように説明できる三角形はありますか。」 ○「説明してみてください。」
	まとめ 四角形の内角の和はくさび形でも 360 度である。		
まとめ	8. 時間があれば星形の角の和を求める。 9. 学習の感想を発表する。 10. 次時の確認を行う。	○三角形の外角の性質を利用するように促す。	

授業のポイント／

- ①「対話活動」に関する手だて
 - ・対話の結果を全員が説明する場面を設定することで、教え合う場としても利用する。
- ② 日本語支援の視点
 - ・既習事項は黒板に掲示し、暗記できなくても根拠をしっかりと説明できる環境を整える。

5 評価規準

- 平行線の性質や三角形の外角の和の性質を根拠にしてくさび形の内角の和が 360 度になることが説明できる。(見方や考え方)。

6 資料【具体的な活動の様子】



☆注目する三角形、その外角、外角と関係する内角というように、スモールステップで印を付けさせ定理を利用させる。内角と外角の関係が明らかになったところで根拠を説明させる。



☆本時で利用する図形の性質を掲示

☆対象生徒には直接支援。

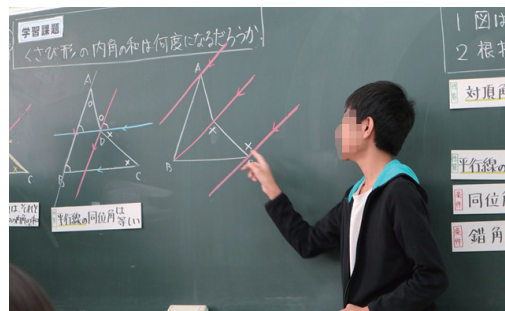
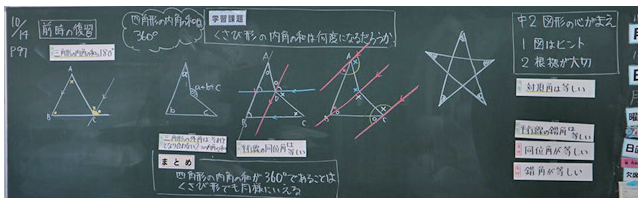
☆初めは、個人で。次に2人で。最後は全員で表現活動を行った。

7 授業者の振り返り



☆生徒同士で質問をし合うことで、数値化した意味の確認を効率よく行った。→理解支援

☆人前で発表することで、本人の理解や表現力の確認だけでなく、全体で確認を行うことができた。→表現支援



日本語の力は比較的高い生徒ですが、教科特有の語彙や表現の理解や獲得には課題があるのでは、と考えた教師の着眼が良いと思います。「聴く」ことが苦手な生徒に対し、教師が個別で対応することで、数学の語彙・表現のモデルを示すことができています。また、それを使って、ペア、全体交流の機会を作り、学級全体の学習活動にも参加できるように計画されています。

プロジェクトメンバー

代表 見世千賀子（東京学芸大学准教授）

委員 菅原 雅枝（東京学芸大学准教授）（日本語指導）

台中日本人学校（2017～2019年度）

栗田友季子（校長）

松尾 功子（前校長）

河本 静夫（教頭）

研究・実践協力（教諭・順不同）

佐藤 敬示	枘田 悦	北村 康子	久保 壮史	指山 涼
大潮 一夫	山口 夏実	澤田 善蔵	卯田 剛志	上野 穰
太田 浩嗣	石塚 直貴	若泉 勉	廖 明嬌	石 翠玲
林 怡恬	小島奈留美	駒井 教雄	西川 洋美	辻本 修作
折内 大輔	梅田 結	三輪 信之	石橋 正人	米崎 稔雄

在籍学級での日本語支援の視点を取り入れた 授業づくりの手引き ～台中日本人学校の実践から～

2020年3月

編著者 ● 在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業
AG5 運営指導委員

発行者 ● 公益財団法人海外子女教育振興財団
理事長 中村 雅治

連絡先 ● 公益財団法人海外子女教育振興財団内
AG5事務局
〒105-0002
東京都港区愛宕一丁目3番4号
愛宕東洋ビル6階
E-MAIL：ag5@joes.or.jp
TEL：03-4330-1352
FAX：03-4330-1355

印刷所 ● 株式会社トック企画



公益財団法人
海外子女教育振興財団
Japan Overseas Educational Services

